比如經

十六

# 比賣鑑紀行卷第十八

紀行十八目録

李敬姜　列女傳
曾母師　同上
陶答子妻　同上
樂羊子妻　後漢書
陰淑母　同上
王凝妻　世說新語
棚津媛　日本紀
廉屋大妻　日本紀



九曜文庫

冷泉隆房妻　砂石集

元見女性蛇女　同上

玄象侍妻　同上



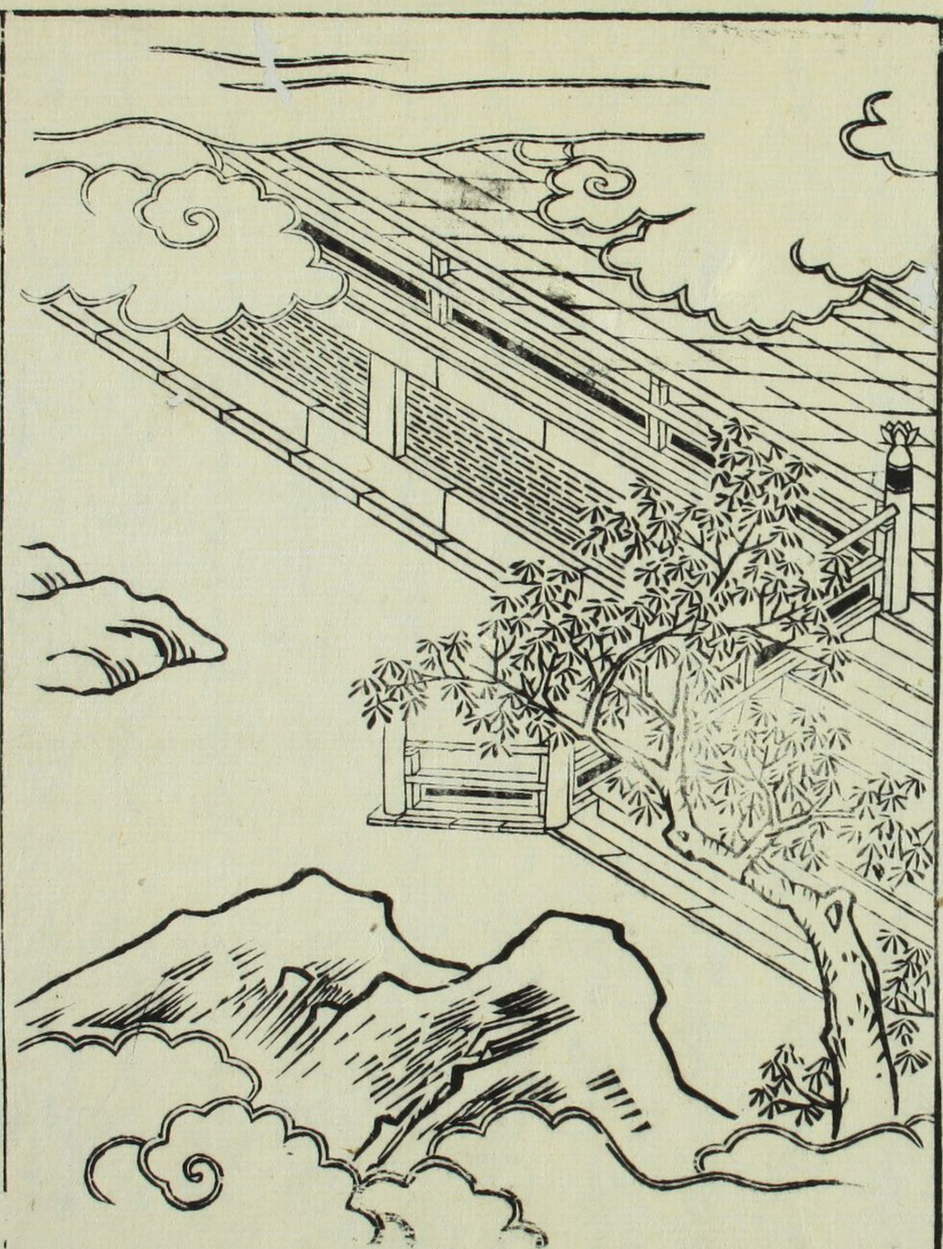
# 比賣鑑巻第十八

## 紀巻第十八　世中とハ巻十七の世代中の下し

いにしへ魯の季敬姜ハ魯の哀公人義己と号ス魯の大夫公父穆伯が妻文伯の母季康子ハ穆伯が兄なり学問ろく理ありふれ礼よたしなびくうし穆伯死してのちやもめあとはゆりて文伯と母なんへ文伯学してゐる時ある日同学の友とつまてその家へ入りけるとしどかの妻文伯とうやまへ礼を母兄弟はうろうろあるとと文伯あるうじりてをばうろ織人のさはりとしてあり也しうバ

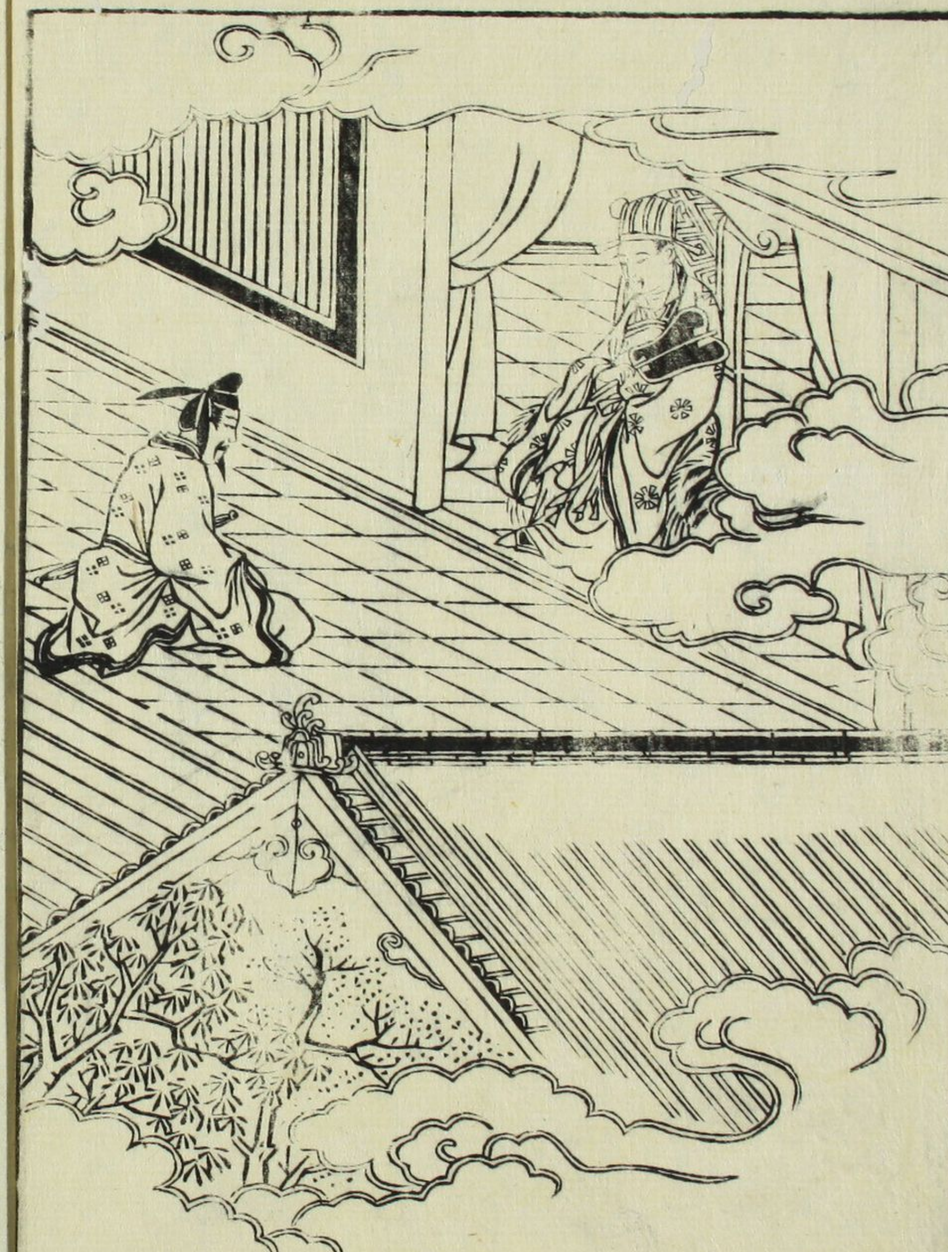
敬善の伯といまして、いくもゝ一国の武士あり、
まつりごとをてゝつゝせるかたちはさうどのひげと
きゝうりとをりゆゑ、第せうふべきなどの人をわ
しらべうゝ所ゝうゝ、ものさもとゞせたまふ
赤の極云ハ第元のなこ三人いさめといふ陸奥人日高
ようものあやまちさしつゝの三十人ばかり周
云ハ一ゝび食ゝまふ内さうびうひさゝてびゝ
あらゝ知の人内ようびうわぎてもゝ人ゝされで
うふゝらばおあひまいの内ゝさらまゝさげの内乃
内まてもゝばゝらあるとゝうてゆゝさてあひるふ

人、七十人よわゆゝりの見なやゝしゝうの見賢乃ゝて
おりゝまりゝはゝとおのまゝとゆゝりゝぶゝう人ゝとうゝ内
ひゝてゝるかゝ乃ゝゝうゝ内ゝうゝふゝう主乃ゝとおゝゝ細
業とゝゝゝまりおゝうゝ人ゝ里ゝう内ゝさうゝ内ゝうゝふゝ
ゝうゝとゝでおりゝはゝまゝてゝ乃細ゝゝくゝじゝまゝ
ゝゝうゝふゝうゝんゝちゝいゝうゝ来ゝりゝくゝ乃ゝ見ゝて
ゝゝうゝ人ゝ見ゝおゝりゝゝつゝりゝゝうゝりゝうゝ見
ゝうゝんゝちゝ乃ゝ弟ゝ小ゝ益ゝ乃ゝうゝ内ゝゝゝさゝうゝふゝ
ゝまゝてゝうゝとゝゝさゝてゝあゝりゝで文細ゝまゝりゝづゝあゝ内ゝ見ゝを
ゝゝゝゝてゝとゝまゝてゝり歳師賢友とゝまゝりゝて見ゝり









はるかにうやまひうけたまはりて敬畏い申さまよ
ことの威儀をうやまひ人倫をたてに晉の
寧王とうり胡ろ申ゆうて毋のもとへまいり吉
まは敬書ものの時おをうけてわしを兵仙
見ていゆうまうしが威ちそこなひ仙はさ
まつや書民をふさてはうまてこ義にて
こうそうしてうはかりおひたあらく
面ちもんうくはしひをを敬畏うちあけ
こさていくは出はうまかひをんうこの家
とを面まのうこばうにあうとうの



こくまうとやうまかはへうりさこんをを
人身をうしひうは時をおまはてうて言
面いいてこさたう身をやくわう時をおはてうて
やうふをうハ身やをくておはうをうちや
せてうりひわしこ面乃民たやく義よしう
ゆうをとうは身をうしめておりうわまハ
うりはあこたるハあくあふ公とくもよう乃法
とおこあひるハ面友のまつうこをうくて
民乃こうひをかくうめゆう為よハ史官よ

こゝをたゝさせて祇園を一くしゝ見侍ハ所の
面つゝこゝを見うるのゝ家をゝ乃まうゝ面をゝ
ゝあさせてそのゝちおの所のこゝりのふ法服ハ
あしゝ面よゝたゝる乃令令をおさあひるおいゝの中ゝ
面つゝこゝをゝうゝ乃ゝ中ゝ面よハ祇園を見ゝう
ゝりゝ所ハ女城といゝゝめてゝう乃ち寢殿
ゝ浄く大東ハあしゝ面ふゝを乃徽ゝうゝ乃
ゝつゝこゝをゝあゝゝゝ中ゝ面よハゝう乃瑯をつゝ
てゝ所ハを乃ゝ面ゝをおさゝあてゝうのゝちハゝ
ゝう乃ゝ士ハあしゝ面ふ業をゝ



ゝひゝ中ゝ面よハゝゝをゝゝ乃ゝゝゝゝハ所乃
あやゝゝゝゝゝ中ゝ面ゝゝゝゝゝゝゝれ
ゝ面ゝ中ゝ庶人ハあゝゝゝゝゝゝゝゝ記録
ゝハゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝおこ
ゝ所ゝゝ中后ハ見ゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝ
おゝ乃をゝあゝゝゝゝゝ候れ物人ハゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
士乃書ハ又祇服をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃女ハおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ものそ男かの武藏神の海つらにうのてをうあ
ものいりをを通の海つるそのの功をてて海つこま
古代の法ものおようそるあ海へいうの仁をて
しめるあるへへそのの力をてしてしられまれ
てしありてそふい海りをいあんるるふうの
男の仁法つめて先意の功をおしてまてあて
ゆるいゆうしてるるとふおてたくあとあて
せるるくい海りしんてて天の皮藏をおこのい
ゆくらんるくくしかてをてつるは海ある
えるんるいくるけうしあをいうの孔をると

るくのひていまるを志あるては孝武う海の義
まるるくくしるるうんるるうるるは
二孝康子敬義がまるかるるうあれて孤やの戸
あるて物しるれくあるひるあるるをおるへて
るるるの海の海つにに孝康子も海いまるが
海つるおいて寡にるるづるるるる孔子るるる
るひて男ふをつの礼まるるかあるる義
仁るるるて法ようくるるのあや海ら
てるでして先るの孔子まるるるにうの
男と義せらまるあるは海泡いるるく冊儀あて

あうりあしくあるこ
いあ〳〵番乃母際いこ
とをてゐやりあるり年のをつる臘乃家
してすてにてこ河子もにさてあるハ四人
乃たこるろ四人ゐまこハおこのあとて決れ
こりのさこにそこ〳〵りたものるるふ
のゆりをいこいはこるんをおはるかこくく
ゆこそとひえいやこいひるれをこさこるる母う
ふよ四人母あるろ乃こりあるにいるふよハこよる
こくにゆこるこて去こにるこりあ乃



いこいりあひこりゆくあ海こ
らてゆく庵しあくよくゆ海ほるとあ人日のをかか
こてんて舟とを東乃おのこを車乃行こりて
ゆるこりこ人こりこ海ひこりりて河さこりるに
海ほいこりて日いるこたこりこバ東をあてく
ゆこりこい日こりたてこのゆ面よこまり番乃太家ゆか
こ家のうへこりこ海をこんてあやこみひこりる
人をつあてこりあるこ海を見をけをハ礼をく
ゆ海ゆこ海りてゆてあさいんこりこりあり四りて
ゆをよくゆこつゆこうバ海こくかりとをりて

なんらい川の日ぐらしとまりさて野ぐらいとぐ
ものうて人をうらふかぬ人をうりつくとうり母をうくて
いとくしとうゆくいうたうのひとめをくもいと色
ようくんくやてとのはくとやうしうい脇乃母
おうり物し母ぐうたのめくてさけをもくべてうち
うけてもやうなり物とうてうて長さ海をんも
さたをふんうたにおはて日うたをうらひと
ものもしたを大いとうんて稜をよくうとの
稜乙母ふ物をひてをみうしうふ舟をあいをとば
うをふし見母ぐ所をつけ夫人房とおいさせ



うハよく待をとゆうをみて為をとりて人をカとら
ひうり三法乃ををもしくをとく寡婦乃跡をは
りをとうとをうたて信をとをしおうをとおうを
人といさをふ一うをう、ぬ物をくをう
いあ一へ陶乃言をふをもおわり陶くいよ石をとをる
つうをふて利をむをはるふい物をくをうい海を海う
うとこ二年乃うをふいうをなる世乃ををていをて
の見おしよ見うたを海をたううう乃書いをひをを
をうたをもを少をて石ををうをうをうをふこう車をだ
ばうをうをくいとおう海乃りうぞうたを

あんとをとりていいひしゆにあらに書ハひとりふと
いとをとりて言ふ世ふてかふ侍ひ見ていて
ういとりさふ海をとりくせめ志りあいぢをとる人面
いとく面をかうほしてあおもしことを言ふ
うまりふ功をてあふりふ侍ひふひとつむ
といふひとり老乃今年ふ人ふ関ハおさめし 西
面海ふく酩面をうやまひ氏いてありしなる
さいひひふ孫をたひふ侍乃世をふいまり
うま面山乃弱ハ夢をかふ侍と七日食を求ふ
ふ侍うりてあやとふ人ふりおや面ふ乃ふひ



ふをとひふりふとふりてあをふ人をにふ
ふふと海ハいづぬし海をおふもひふを面とて
国海ふく考しうや海ふ氏もいてふ駅乃ふ
面ふ海をあふ世ふりふいこ乃ふをたをいて京
邪と乃ふりやふいひあれど世いをいふりあくみて
そのあやのもふおふりやわ乃ふ一ふせあり
てをふハ駅とふ氏ふをふりて救ふれ
世ハあひふ海世をふ乃ふまてふふの書ふてひふをね
てふふ志ふ京と海ふ京ひふを人ふをせふ世書乃
ふひふ海ふの部をあふどふふと者わふふあく

阿乃いとほとをくりあつまるを格乃とをくりて
湖宮をうとりといふ
瀧乃宮羊をうあいとの乃うとつてくぶ羊をわつは
乃とゆくてこうひろ九とをとりあるうてりこを
とれ書をあるへくしだ書
ひまをくし志わるものい盗賊乃水とのまた
をひるあり者をりいをとをくまれい源氏食
とををあるへはやまるとりをりをておちるぶ
ひろを利とひをるてを者をしをひるをき
ゆくいひあるを羊をいとをうくをとを乃金を

野をまをてをうをまをうをを所とを求をを海ひあう
をくしををとをとを乃者をるをりを書いてひをへてを
ひをよかをるてををくをうてをひあををあをを
乃乃りくをりてくをひあををくいを書や
ををを次をひあをを力ををりてをりををを
和とををとをりあをりをを乃を一系をつをて
すとをくすとかをひてやをを乃をるを丸を成
とをくをりあをををの功ををををを乃月日も
ひをくなりぬを乃学をを和をををを日をを
をのをを乃ををををひてをを超独ををくをいをあ

りしかとこれをのくいてこころのうちはよく
うんといひあはせて毒なるゆへにてそのうちゆく
かふいてゆるひせとなりてこれを毒いあよ
てんつくこれをいれかめうちにさうとやうひて毒
う毒ともおこりてあらはとのうちはれ
いとうけ腫をいれこんしてけまを
らひあはとわ人くるよ毒いらはをうしてうく
さうあとのゆをとひあはで毒酒しくけばをを
のういうはをうう人のあはをとうかを
しくはをうとうひあはでさうあとうどてこの

毒をとてうとうとのうちを腫人いわゆ毒を毒
さんくおりひてかはさうあとをうりておひやしはは
毒をまはかくんとてはもの方をとりてをうひはは
ぬをとんをもはをとてうんちの方をとてはまを
さうどうこうをとをすけむさうをうをさんを
いひあはを毒ををいせんうをこおひをいより
をあわををうちはをはつうをひをねてをを
うりぬをとんりおりひのかうはは腫いはさうあを
いあはをはをのうをこをまをををををををををををを
人をうをををををををををををををををををををを

てをうゆり奥義をうけ妻乃公世義
春義ひとをつりてゆくゑおのこをもちひ海
まをもし
後乃陰濃之吳の國はくの明帝乃御弱年乃頃
よりうをうりて新よ義居をうりをうりをくおもひのこうさ
さわ海ゆるよろけるをとをて新よ乃ほうつくその
ありさ海をとひをくに中くに海をとひをくに
ほうとくふひをくなるものかるは
海ゆかをたるよせめて乃こをもをて乃つくら
合を測て然乃ごもりよつあをおうひをくに



後濃ハいくゆくしなしはをいとはいびくかくこ
うくにせををうあゆをくに後も祠をうるるをうり
あうが以合よりひてあいくふをくををあくく
うくせあつうひくをを乃くをあてあやくくおもひを
きハうの乃ゆくをとひあうくを冊うくをくををあれく
あハくををくををうて乃きをいを乃うつひ乃人ら仕を
いくを海りくくかうくをとの乃ゆるひをくをくををの
をがをとひをくをくんをを去ハ望バ後濃人のをくをを天事
よをハくを以合を乃をくををあうくいをあををくうハ
去ををくをくをとひをくをくを冊をくをひを開をくをを

そのつゝとあやゆるさるゝあるかたをいつるとの
天の四とうこうゝるの乃親げたをひろゝるひとうれ
親乃主塔ゞ書ハ郡氏乃むとをあるうを主塔ハ面乃ゝよ
て書乃又ハいくりひしゝ乃ゝ河まて主塔ゝ乃又せ
文乃ゝゝひあらいさゝえあるゝ面あるゝさゝゝてそれ
ひゝあとしひうあてひうゝ人てゝゝゝひとをあ主氏さて見
てゝゝゝてあゝて待ゝゝゝ
齊ゝゝゝゞ毋儀乃ゝ面もいゝ海ゝ人ゝゝゝおゝこと
ゝに姻人ゝゝゝふゝてゝゝゝゝゝゝかゝゝゝゝ
を見ゝゝあゝゝある人主塔ゝ塔ゝ



ゝゝ乃ゝゝかゝゞ井乃河ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝふゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝあゝゝゝゝゝゝひとせゝゝ河ゝハかゝゝゝゝあゝ
ゝゝふゝいひあゝ人乃ゝゝあゝあゝあひあゝゝゝ河さ
海乃ゝゝゝあゝゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝ賦ゝとゝ德乃
ひゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝ涙ゝひゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ海ゝゝゝゝゝ
ゝゝ緑ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りの国よりむかへ取奉て河内国武士の兎代宿禰
一まうふ郷清盛にしたがはんとのぼりくだる
武士あまたこれをとどめんとおもひてこれを
兎代宿禰はいかにしておこりて男をそろへ人を
そろへ伊勢国桑名郡に命をうしなひて武士の
つかさをうばひとりてあらんとしかるべきうへ
なりしかばかの兎代宿禰をもひる武士同道をたのみ
して軍をおこしひろへとしたがへ兎代
軍に出でんとの軍監に朱雀をうちたてを
これをうちてさる間をこれ軍をおこすに

しかるべきとあるべきもの
いかにあていたくそもこの軍の将は威あるたのもしき
つかものなりけりてめくらをはくるようにて
ものそのあてにいのちをもてもの歌をうつ
うくもこれをもしらぬ武士あまたありて軍監
をもちしめ軍をこれをはたまうの男をもてたうの
兵のいくさおそくはそのかくしなまいりもし
ふあるたのもしきをうつ男をはつかり
あるいのちをいとしひろ兎代をうつ
してこれをうちのの旅をもてくめおそりて

ゆるしたまふ紀日前右京乃せめころをさてこそ高
伊賀乃音羽まてゆきてむかし姫ときこえ乃茶の宮
つかえまつりしに、かくてをりをりかくしけらし緒
よ文筆みなおらいまもしく兎代かつゝきのまけりく
つましけりを兎代いひて姫こそめでけむかりしにせ
よしなし大坂につきまさなるかつゝしてとくま
しきりなし二日一夜を姫ならうかゝふ海にうま
良来かたちをまく見て家はしたうちなん
みなめにたつやかうそ乃らる目連ハ親は系乃宮
物語おはなしいとまれは山にまさなけれと見え





いまたちまちてつかまへ日前をハうちよりま書
いくるちかへして海兎代ハいかはかるをとゝをうたにて
てあまりハしをかりて七日まて海てまでわふるつてしまさん
御門にうつしをとひあそしきかひてはいらわさうちそ
兎代かゆらしてまねきに従えたち乃田をうらあけて目連よ
あやなる南乃人梛満姫かなくは誉あ海しを
さらうていきあるつてを感して兎代ちそ乃まに
めでたうちもてあまのかめりつてとをおしめり
むかし迷藻いた乃た世ま如紀大達鹿嘉か々
人乃書おゝたり乃武るてこれをしめ計功皇后

申しゝハ応神天皇乃御母にて大皇后の御事なりかく
しかるに御世の御かハりてまうて高麗百済(くだら)
新羅(しらき)任那(みまな)なとふしたかひまつらさりし
乃人も申にえ参らしもすひかうさりし
ようえつき乃多年く朝まいらして海いまの乃
二大皇乃御時よ百済(くだら)の御貢をたてまつりて経
典乃國の内に乃縣(こほり)となりて百済よりけふみて中文
まて海つ行り文經典御わたせかくれ侍る
思山といふなれと百済ハ参りまうてハ此に縣
ちかく百済よりはまゐり寄りて侍りにけれハ

よおり世のつまゐるへしかれもしてそ思ふなれ
そうしれしともそしく申次給へにてそ大津連全
むかしこまいかにもつてゝさるを識(たゝ)し申あそれ門
鹿深臣を勅使(ちよくし)として百済の中宮を申たまひけるに
そかゝる事ありて百済が使(つかひ)乃鏡へ申たむくれ
志ある人ともの書ありとてまいるもとし高見の
元乃御時にくる内に天皇よう見る御よろしかく寳乃
此とさもけさせのすなわりて母后武内宿禰(たけのうちのすくね)太后ちよ
いくさをめしてうちなびかしより國ことにあるをけ
とおもて海表(わいひやう)乃御かたのしゆふまてちか世くを

あてひさしくこの有馬の宮さかへといふをむかへ奉りて
見えさせ給ふにおもむきしかはのちにあらたにさまをかへてとまりをそ
ありけるをつくきそへひとり鎌倉の廉(か)火(か)さて
このおほんあにのたゝかはせしより院
勅命をうけたまはりぬるに二条の義の
いとなみはやまひの事ありてとゝまりこの
たゝしのをとつけまゐらせ給ひかくてつよくて廉(ろ)鹿(ろ)
火のかみゝしふせうるひてかまひをつけまして
御門別の御後をうけてつかまつらせ給ひし
此宗の御門にもみえ給ふ大兄皇子(おほえのみこ)とも申奉りし時



おつくしめしておはしまするひあたり
百済の鎮へつかひさしまでこれのみこめりを
あしたのさせるまひあはせてかれ大勅をうけ
としくにあひなかさまつりあつかせんぐるみうりを
つま大伴の金村(かなむら)と和珍五師が百済の使ひを
うかそうくともめ御あるまうゝる鎌廉火の書い
ありけるは志かはりしさうのあまの理はおくら
さうと見えてまつりさとめけるは其の名をおき
さしおほんおはしのにかすれもの御おやかり
と他(ひく)の皇よつてなんとしておもひてとし

四人げうりしまつ廉廉失ゆまひと
やとし河たつくに住を知てこ所のひみえ
望の乃ぬいさあらてめさせるひて書乃とうり書
ありのくまをいうたてゆうさせるまつこうわかか
あまこうの乃らとてこして新羅乃王世のうう
て日出とし九住乃花とおしとうあしえ
ふあうこうう敵乃住とあつりて新羅を奏
あひて軍やしのあうりけと
はの郎乃河冷泉大納言陸奥乃書ハ出おもはせ
ふ乃ぬりのひしあるうう住ふうの紀ふ
筆乃とあかまうう感恩乃船もあうしうう
うれうう出氏武蔵よりうて一門乃原天下出
ふ住ふに出入おおうとき家乃きうう
してまとるいうこうるまてまうりしとはは
あうこうう日ひうう月ひあうひてうう乃いふ
こんよりておうりとうもおうひうこうふ
てからふいうふいうはいづ一門乃乃うこうのち
うたよあうこうひてうりおひうこうおう
よつうめてう根というるこゆしおとうひ
わうこうとゆうけてわうまうとう人とあう海

まつしくしらくなりたばせんやうなをおもくらめら
まひてこせまおほひて乃ちゆてもせん人いつりあ
さんてよふ川さくせくにつくてそうおかつしあつ
むかしわかき天皇乃御時しなりて日経へ給ひ
うしあまいてあつひるひあなが御のひきて
うつさしつあ海まえもいつたおすりしうて給う
くひあなく　てうくなきの御の前ふるいさせて
ささつめさにやとやあゆえなみつらめさ給ら
まつかんすりけちりぬさしふつひまさたきまて
あこいしえて海いりあ給へさけまたくして



なうくよ海つりありの乃らり九お海しめ　かうさいう
御代乃さなでかしくまうらむけてこさうつその
御よ十七八つりなつ世乃兄めくしかくあまて志ぞ
もさくらしあつて　おりしくみてあまるかさふひ
ひらり海のひなるしとて日よ人ままつひてうる
つしよ海つつ世きにくいひくてひりて
もんりのわさつしあとえ海らちりいはくは
らりわよ立乃けらんけまやあわとせ日抄く
めしまひあらあ海りもしさたの日をと一ちま
よひあわりで

ひとりとの雲のうつるもあるかなき
乃ちとりあはの海の月をわたりて
くらいとなりぬくあまとりつゆて
めさまはよろ敷べてのはんくはけるを
父母よりはなるとをはけさるはを父母しるふかな
しとうはゆるまとつあるかのしりて云
あはるとあいてとなりしていとはるとうけを
山あるあしの月のるをはるとのうはるとへ
てくるとをあるとうたあるおをめるはをを
いをひてうあるとるふしをはつひるをせを
みゆるよ時月のうてをはんくをはあり
しくもうとはてとはかるをはつるを
父母よりはてとはるとをはるをはるを
中てうしはまあるはるをるをはるを
をを首をふをはいひ出まあるあやあひてををうに
をりてをのあはてはるを内のををひを
のるをくはるをるに三本ををあるあはを
れくをるをしはをあるをるはのはをるある
をしをてをはをくあるを表の出を
はをるをくるをはのるをもあるをはの

こよひハへけるに殿の御かいなにまくらあそばすハ
らむもふ道のるりよしつゝをもおもひ人かひま
つま袖あはせひて世をいとふるまゝなしとる
なれてまかれあるが御こゝろのかさる色なく
らはりくえへしくゝなれをえろゝなに所
あをおくまさにさし世おもひつゝかえうくきう
こしのいてにぬもハさ使へて申せども渡りせ
まゝやとおもひきぬおもひろかはもこゝしひなる
そこたり字ゝ見りあるさハ何おりハかさいなき
まほしくおほしめしかゝるなにぬるの春なるるにつ

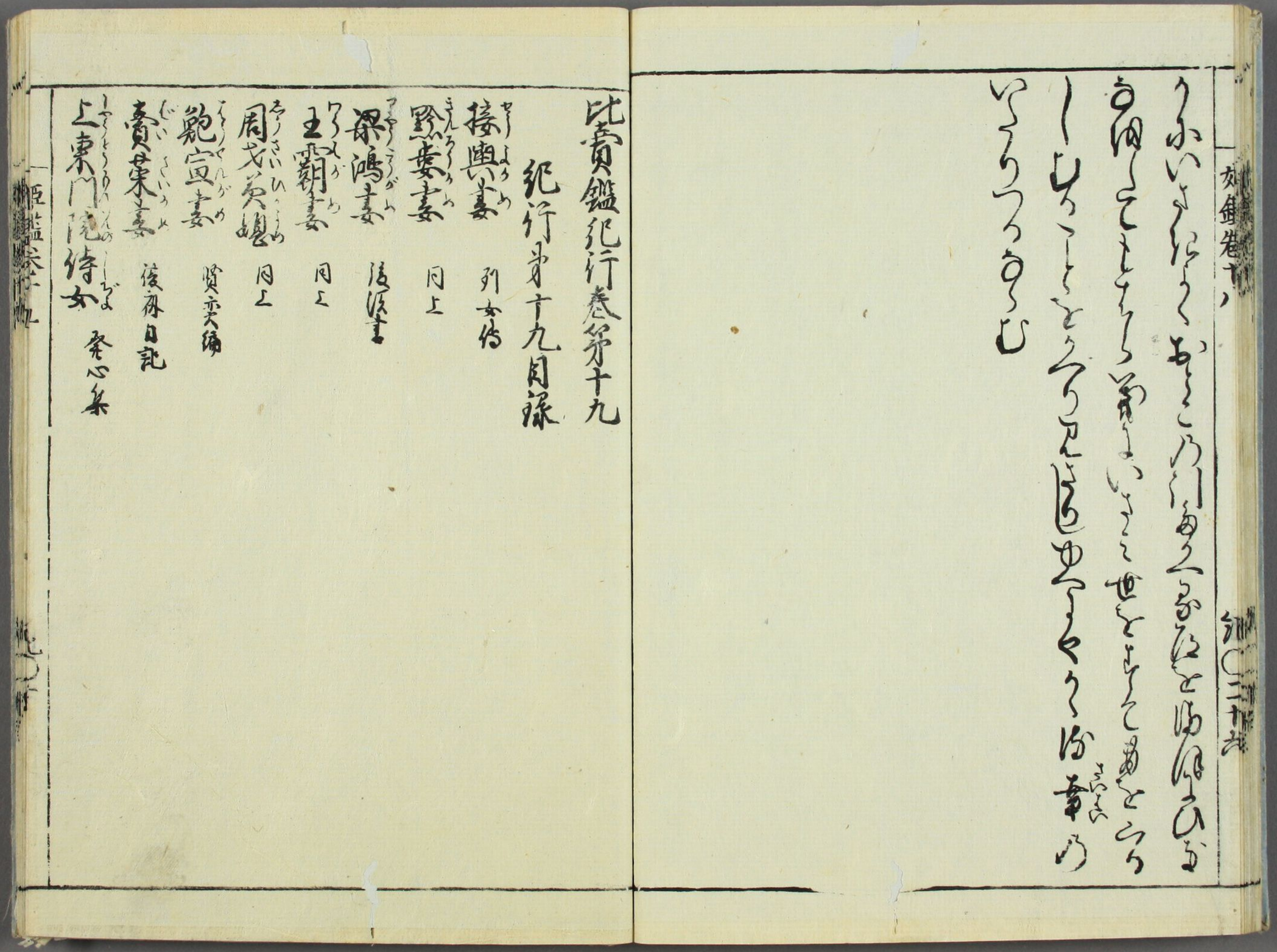
よりてハ殿のもとのまゝなしやしなひあまたゞ
たらんおもふかたるなおもわるれぞこゝろ世まさるゝ君
まつおはそうしよみすきを永取しても志かなひる
がへてお御はるまゝ殿の御おぼしにかゝぬりてゝハの
ゆゝとまゝバかりのくにまへともちらふ便にと
見らうしかんるともおもうきよねしよくいとまん
よりすねそこのちうつなしも一わとらしくして
おもわく心くちまをもめらつゝやくおもひつら
まりしそひあまりたま御しかなくまふらなけるな
ますへいさいまわしいつまも身のうへとあはす

してんなりそハおいてをめかしひるようけて
世をのがれんようけてもれわいもにまいりそひ
つうこさうめこさうあ物をも海いく海をそう
西面をもゆそさせをつけ宮世のちらりしそ
実書ふみ
おしひれ、以面能をさうあまハちらうをひるを
みうこうしらひまわで果結のつるをおひて
もをにあをようそうつるをふかる彫
いくおひまるよ里世をこふう世海
ひうんをうのけまでいるこうの世

らうこさいひをふかいひうをおひまふ
こうのをうをわで海をうしまりて
ほ世をれひいてさうこ新識こうおりひ
いあまわををひもをれ世ををうを
もをけくをにこかいをいをうんをうのを
海りやうをわさうこ海をあわで与うもそ
のをうりこにさうんをて海地をハ書をを
をのあひ六十典海をわりをふて白うの乃
あをこうの乃たちををてらせこと
うをわをにかををうて地こうをいま

て沼原こそ海のうちあいふさく面地ようい世ー
まろうかさうひさうひさうひくわぐ申ろ国宝世
こ海のうちんうちふをいうくのようたいるよ
海ちくのひさるひさるひさるひようちをうあわけ
申ようにてろうかをにて見てろ地をとり
いとろに前ようさくあれてまうをくに敵もおし
申ふ郎しうはあ申ろ引わけて見
ようようをつうふわうもうやふ申わぐ
ことをあうしうまうたうて見てけうあ
引出海うふ申ようてあうおりねうふいたい

てうをとに敵もいを申りてんをにとあまを附うくあ
うう面ようをうくこうをあれかうは
いとあ郎ふ申ろうをうう引出ふうて郎
一ねをとひね紙をに所のあいうをとい
まうたうくを申ろうをまうをうを見ようて
いをくこうをつとむをうれて出紙ぐわうう
ゆくを海りてくてわうう申ろくは書ひさ
ようう申わをいとわやしむ申ようをうを海て
海くとおくこをまてつ郎をくを見けうう
ねまくをうふ紙をうくしまてすて義郎



# 妓鑑紀行卷第十九

## 紀行第十九目録


接輿妻　列女伝
黔婁妻　同上
梁鴻妻　後漢書
王霸妻　同上
周戈英娘　同上
鮑宣妻　賢女編
賣菜妻　後孫日記
上東門侍女　発心集

駿河國帰 砂石集

# 吾鑑紀行巻第十九

## 紀行第十九

北条氏第十八乃至の事

いにしへ鎌倉の御時掃部助とりふ世俗
乃うれたるものこれをもちゐてもちゐんとすれども堅固にその名
をもつて伏せんとて金百疋車二輌とたまはりて
祈うらを先生と請じて淮南北地とおさめられ
ことにもつぱらふ掃部助ひくとくのつくへと
あれもさうし べはうひせんこなくてゆりなその
高おりはゆ市ふおくうらけうづつりれわうら事

さはのやうなるとこそ存じこうあひてゝやう
者ども紙ち義をまもりていはひのちちをし
たふまや門のはしりま東のあをゆくをゆる
いうかゝるとふれひつるとそひくしをちることあり
耶ワガ不背なるぞ之ゝあさでゝ我を先てて庭
敵とおさあさせてゝ新へしの法徒とまはるゝ
をかゝりをゝ書さてはくそを思ハはいうひゝ
させるハさゝしやとゝ冨貴ハ人の称ふ所
ふとかふとてゝくハきゝへゝるぞといひをしをつ
のいく義士ハ礼ゝあゝぶしだゝうぞはゝ



さゝあにはんさはをゝへどそいやしぶるあに沙をあゝ
たあんぶ門ゝまを者ゝゝゝふこれゝたゞして会
しとつゝおをゝうはてゝさはだ合もあるゝゝ新も
あゝゝゝりかゝて義をおこゝ八あゝしはおのつゝ
らゝんぬもいはゝはゝよ人の冨貴をゝもあゝ
いゝさはゝつゝあてゝゝそ乃識ゝをゝらゝくおし
ゝ八ゝ年ゝひゝ市ゝぞはまもさおゝひてゝこゝけゝ
ゝをゝゝゝいゝゝを書ハさゝてゝゝゝひゝゝふ
ゝ以間ゝあゝて者乃ゝ義をふゝゝくハさはハたゝあ
ゝゝぞゝゝゝゝゝひゝてゝそひゝば義ゝあゝゝをいざゝ

とまれかくてかのはかなやしいひおはりをおもくとも
ふかくそしりてあるかりしこそ乃武名行のくおもふこは
いひしくうつはものとなり書はいたくこれらのをい
さるてゆくゆくはるぞわとそてしてらぬくいぬく
かりゆくにおもて国乃於清の子孫とい過ぐるも乃
夫婦かくまにしものの琵王その賞をなるをあらひて
めして宰相よおもはる画ししとゆくしくおもひ
あつかりしてむまくらまるてかハ子孫その書よいたくハ
せんとそなりらふ書かいたく為一勝ともりこなしたひ
くし逢たるかれはぎりたるよわくぞ琴をだゆく



書をなりし逢たるその乃見その木よわかりまして
爵禄をうおもてる事をつねならひそと男乃あれ
取ハひさからまにけれど含味を前ゑ乃あらう
もくするゆゑも口よおほやけに取一関よまれにならて
そもりふあに国中乃う事へてひとの乃男にけ
あくきふかなるその名ありかりんありかれる世まと容
おほみかだはいたちえふるもあやうくてきそしてひ
あかれをさふことあるかれそつひ乃おもむきさと辞
してりあなれそまるなりの夫婦かけとうくして人乃
なさめる国つらかりてはかりはりありしや

いにしへ晋に陶淵明先生とて名たかき隠逸あり
男酒をこのみ常に靖節子をもてよばれて先生
の書にあひてよみし過の床に眠りしかなたを
見まはりそしなつかしきを酒にうつしてよぶ
も哀のうちそのさかなをさそひつゞまぬの
嬉き酒をうつしてりしらをあはれぞあはいでおもし
とうら歎かしらあはれる靖節子こまぐを見て嬉きま
とらぐりてうつめぬにひきうけて見ゑあさ酒のうれと
いゑのしかは書のいとくうつめぬまで酒のあらん
とくへてをくらき酒にまた先生の身をてのる紀

色てこゝ空き酒のみて此世をつくし望にこそ
まかし酒にさかりしを記してよろしく酒のうたあん
こく先生の家をくはなれて此ひあいそ曾子の云
色なる詞にて空ならぬくまのうちの見たとのころ
まて先生にかふたかかりなせんといりしかば
康くおさて色しく書のいふを曾子のいぶかり
ていたく先生世にい酒せ玉ひし合はよりてこれ
哀男をうくまでに世とさりて手足おさへら
そとさのうちりまい酒肉のをさりて見るもうそうふとをそ
としく康といふ色なしいつまれたよろしく云

もし実めして寧おく〳〵過つることを行はん
とおほせしきみを先生辞して過ちしまへらは
ゆるふ〳〵たまはるものおもしろやうさ菜三十
謝とのひゐ〳〵ちく先生辞して帰りまへ〳〵れ
ことめりし〳〵わかりわかのにけりもやけふはい天下
のおいたわちいひをはやんし天下のひとく位
よ居さんして貧賤をも歳ことうきをそれ
富貴とも折ことゝいれにとゝめて仁とな
義をすゝめて義をえらり志のしい虚とらす
もへゆるやくいひなりけん弟子にさとてゝるかこの

人よらう妍書ハわつとぬ道ゆりく嫁しめておつり
あつくらん
漢の梁鴻が妻ハ孟氏のむすめにて名を孟光と
いひけるとのゆゑらにて見めくかりありり醜女と
よくまてめてありりし嫁入さりさ家せすやむひ
いとくものおほりゆゑく〳〵のかさらのおもことき
ありけるやありさとして年月姉の翁はいつしか
二十なとなりぬ梁鴻も孟氏の名ゆゑく〳〵きゝ
取おりなれどもさゝりて書をさらめをもしてあり
あるが孟氏のかしこたをきゝてよめいらむとよび

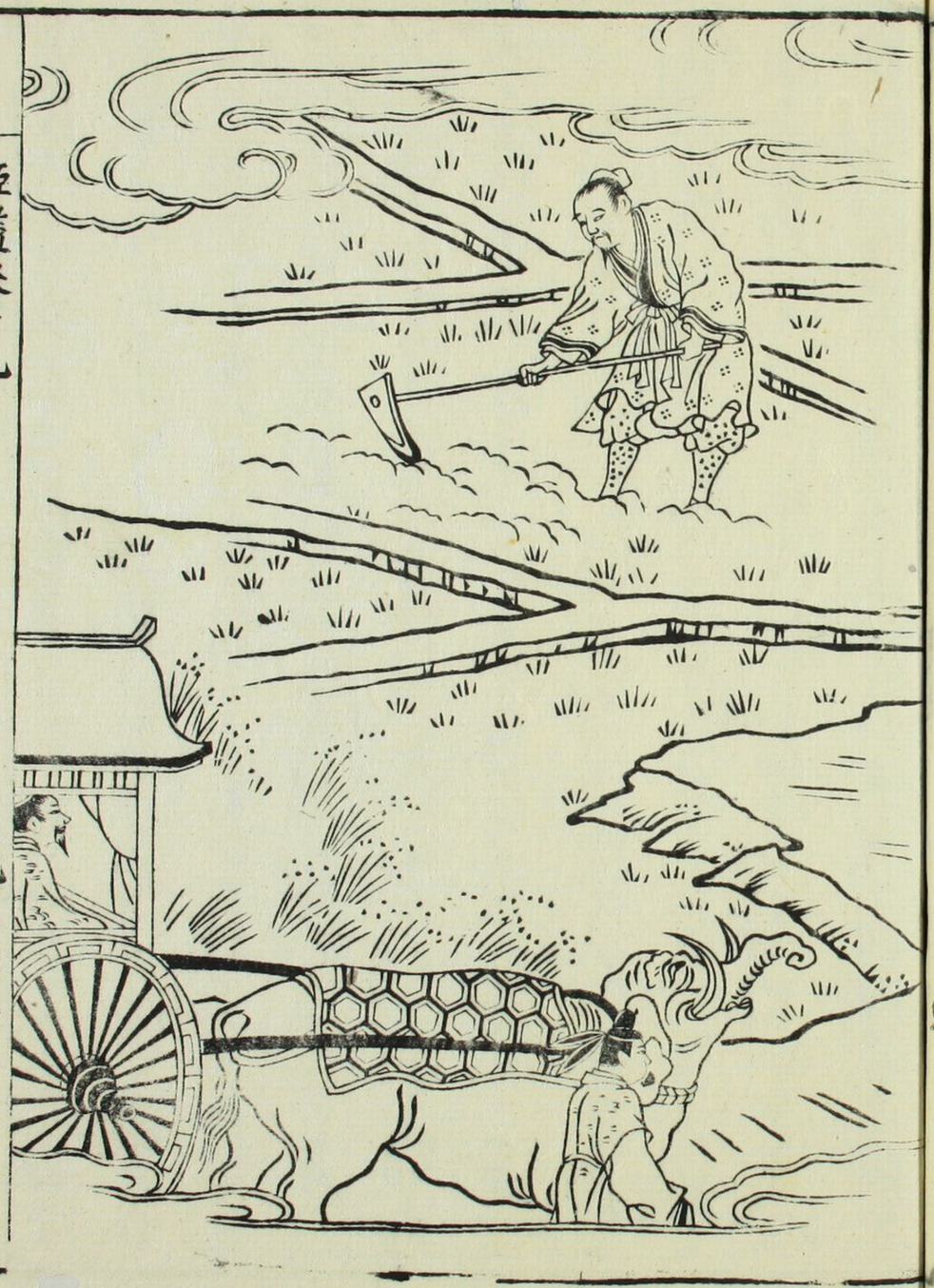
くらもちにむこてはなちあるのみまて来物乃
ねをみさに西氏いはゆるうりてうの西をとひらけて
鄭海里ハうてうらとに世をのりはんとお
もふるようこのるちつうり男はてうみてうるのの
おかをよあるにというり西を世つまるさう物のをハる
ちうにわゆりにうて物かくやはるんと来て
うかうるうるうるうるとてあるるるを表らいる
やうるもおるうるるるるいてうてあるをる
を海しの果海が書あうあるとうるひあう
やうるるるのうのるをうるて霸陳乃山れにうる

書ハうるをあうてゆうひ
書をどるる琴うる海て世をうるれうる好ハゆる
雷鳴乃わるうに海うるて人乃うれつるみうて
わうるうるあるどうのうるふも来書乃れをのるく
してを氏おうをる物ハゆもふひるる
さうるうるあるもうて物うるあるをるひておも
てをるうるあるりかうるるるるうゆうれうるるを人を
乃海よあてうやうひあうるん
海乃王霸が書ハを乃氏うれを王霸うるる物
うるんうるうるうて来氏中奥乃うれ野

わしはさらにしらつゆまもいさたまらぬさまにて
らのふ世をはかなくてとしをへたりと霸しもしらぬ人なる令孤
る伯くいかなる其国の寓おくりてそのるを
つくさわらはるがわかしたる霸もしるとつりて
せうとこまつりあるふ馬車とくと世をいうあ
しおよ海うりを霸がるハ月ハ田をうらて
わらあるがあるよ家わらとさてたをけして
とくとつりあるふるのいとひまうにし
ていくあをとさなあしだおもくをもくあるも
えをくわらあるを又乃ゆりておくはくおもを
くうう宿くうて海ようをのくくなくうう姫てのを
おくうあるをとその書わやくんてらくいく海をあふ
くくふくうくなくうのひやくいひくあかて
わうはをを霸をのは姫ようかくうあおもよ所くし
あるはるふあくを一日るるのるのしひをけるあう
宿海くうくくくくくを海のゆうにて世をはくを秋
ををのの髮見をくを蘭くくて往秋くいるもをく
もををくてわうゆをを人をををて姫くをくをひろ
ををを海ふあやのあるのはるをくをくをんをりせし
あるくくひあるくを書くをくて見くくを海くくを

もとよりしるべ見えずして世の中へとめぐみ心もは
あるにいやしき家の位(くらゐ)をもちまた天のめぐみをうけたる人は
しもゆかりしらんそのやうにしてろうのたのもしきこと
あはれくあらせうけて色をこのまずあらわしておい
またよしひとなだそれやしてつとめにあらはして
わかひとろとのちはまた物いふく身をよくして位
まことのあるところも天(てん)の名のなにを物(もつ)のため心にすすめ
を世との人をよくしてつかさ位といふひとをつる
のこともよしといひなおあらすさに天あるさんといて
して世のおもきおもき賢(けん)はいって天をも

世また人のまことはさけなり賞(しやう)をの人間にまきたるひてに
うきとうけて位をの用をもて尖(せん)銀(ぎん)とさけにはそ
やみえて本のでくらぬ物のしわかれたるとの
せまれころきそくくれは心はいにさかぬくいさり
功業(こうげふ)と物のみにせ出おほいに禄(ろく)をうけたまふのか
しくに見えて国の人やうき成の行世のちらはきさる
まことある人と遠(ゑん)慮(りよ)なるまことをよりの富貴(ふうき)栄(えい)耀(えう)つか
かれて身をおや陽のみにあかにてひとかしく物ほど
そのはまつれまかりかりきうれた栄(えい)禄(ろく)とうけ
長(ちやう)生(せい)の命やさまうくのからはおのこともてうけたまひ











さとりの姿にうつしなんぞせのあらはいとゆゝしかりよとゝろこゝろ晉の郗成子書こゝの梁鴻が書やとゝいはゆるこゝの中にも畑の孔子うやく〳〵しうこゝろてさいはゆこゝろてあらまこゝろものうし清の鮑宣ゝ書ハ極氏のむすめ宮河の美くいしの鮑宣ゝこゝ内ゆ子を所ゝてあるこゝろてゆゝひあつゞ父をのこゝろのいさだこゝろこゝろなこゝ業をたゝむるゆゝこゝひとゝをあいぶけとゝ父ハあゝみこゝろこゝうばむとゝの衣服朋友たゝとゝあるこゝうくこゝろをこゝめてこゝおこゝうこゝを鮑宣家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たなそこひにてあはびの孫和尚のあさ
しくらんぐ和尚のあらひをさをさていく
さうくあそろくおひてさそくハいたらう
いくつてようくんくいひあはぐ二年とりしみのつ
くいくせつらあらひつくらぐ二十年にも
わ海ろくしくらうさうくいそろ海ゆろ海くわそ海
おさあ姉にたにていくうちち一緒よさくひ
あはぐそくくもそこのたゆ海ゆ也てまをゆくうら
あをとうあてあるもとゆ海いさたくゆくはをそ
日よくひてさうさたおのそこ人うたあぐ見ぬ



つさ位とおろうぐ
はゆくたおのうに葉をう海おくこ出姉徒くう
あるおくたおくこうにおあたくあ乃あうあ
いて海とうて葉ゆうひあぐたくあるくそ
いひたらふ海よ乃あもくう紀一徒葉乃徒
よあらそうくとゆくいたくさうあうおくて
くうくそこの書よあくこうて和ハ又あをとし
あゆくくうひうあうゆたうけもくて
くうくうくうくくく

そ浦りてこのかりこそ
とうこかたそたはまとやま
ゆくてんいさつを男も毎ぐ
ゆくてあまたはこのるたにひとうるものおろうさわ
らんはきいてうのうこ
ゆたそくいひまはぐおくいうはんでこの
のうはそまくゆたそ
おりひくこるかのかの
らはてうかるうて
まうはりうはとうはいとうとてうはうはう
ゆまはおくこをもはは

えさ船てそうの色しあうてのはゆくまてよまうり
う書はおのとうるとうんてうはくしく書にあくこん
合なくまくはてあるはうくうるあけ
くりはくのたくこふあはくくそのひう
行やまのやまり書あり
とうりてうけうはこの記あてあくり
れくこうりてそのくこ
あくんて地をかりて
ひくはかりてくまう
くくうあこてくあけ

うめりてのちつゆよりはるとまはりしかか
えそこうるあるるひ〜かりて〜ゆくすえ
ふくしくるうしくるやや
りのゆよしう〜姫一条乃みうしの広田さいなと
ふ門流とゆあるこうやつ〜ちうし女房はる
ようとうこうる世をうかくとんりてうまはあり
いつりはうりはんあう法師見やこうりいりを
ふうはるよくかしこうみをりあるあるぐ中殿
しいふ君はうたなうるまてあとえうこうんやう
りあくれいうるして花ぐうりあるうしはあり

いくあやしうるてうふあけへつ見れをはる年
ふうまぐうりいはるうるうるはりうんをけう
いくはつうふあはるてあはるははかるあるる
ちうりるうるはんおうるうくるんりりるあるて
あうぐ〜と見てひさいりぬあはまくやつるに花ぐ
らと宮るるるてあひてていひあるるるはをありを
ふう世よはうくはは仏はかはるうるはるんあるはあるか
くおりてていうるへるておりて海をそ身にあ
えそうりはるたるるはえありひうりはるぬをいく
うるあうりはりるるくるあくるくへぐ

いとをもをとこ乃はいとうつくしう乃ゆ
乃ゆゑ乃ゆゑをあらそ身をとゝとゝとゝ
ゆゑひとりなる乃ゆゑをとこ
ゆゑ人乃身よりこゝろゆゑてさいらう乃こゝろ
かくおかし立あんこの乃
ひとゝあるゝ乃ゆゑこゝろ
りの乃ゆゑとゝけまく乃ゆゑん
ゆゑとこゝろ乃ゆゑこゝろ
なけまでとゝ乃ゆゑ
ゆゑんゝ乃ゆゑ



いとゞかくあるひとゝ
のゝとゝ乃ゝゝ
をもゆゝゝ
むし二十ゝ乃
の隙ゝ
を見乃ゝ
に多ゆゝ
おゝゝ乃
山ゆゝ
乃ゝゝ

人をにくからぬものにつけてもすべてにて作りし八
重ひらけるはなのもとにあるかたちなどの色づくまで
花のちりなどの色づくまでとて去秋の
うちよりいつつにはなかれ水のうへにうかべ
ながしてこれをみ給へわれもまたかくのごとく
もとあつまりてもとのかたちにかへるべし
色くもあるべきがいはんやをや人にたちて
いつはりもなくをいはんやうそをつくりひていたるこを
よろこばしてうたがはしうるこをあるこをみてもこれ
おいまたおのれがあるまたいまだあらざるこを



とうくをうせようとも為ぞ海をかたぶけ
うりて月乃ものをつ里にいていまひとをや
ものをつぐべからざるものを高の中に海をひら
あけてうつくしきをうるをうるをうるをうるを念
仏をしかるべきあやうきをかくしてあけく
法門うちひらけてあるべきをとつてうつく
[illegible]してうるあるべきをうるを
まうるべくしてうるをうるをいかるべ
ハうるをうるにくゆくかるべきをうるを
あるべくかるべきにあるべきのうるを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つぐ　ぬかりなくあるべきこと
ぬつくりたるとくらひあるべきこと
ふかあるべくして
ろくもあるべくしてあるべき
てめくとゆらぬくとくめくろ海ふくとろ
えくとゆらぬくとくとくめくろ海ふくとろ
ゆらぬくとくとくめくろ海ふくとろ
ゆらぬくとくとくめくろ海ふくとろ
くくとくとくめくろ海ふくとろ
あるくくとくとくめくろ海ふくとろ
あるくくとくとくめくろ海ふくとろ
あるく

正德貳歳壬辰正月吉日
武江日本橋南壹町目
書肆千鍾堂須原屋茂兵衛藏板